

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：32686

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2019

課題番号：16KK0034

研究課題名（和文）十七世紀オランダにおけるデカルト主義の発展とそのネットワークの研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Investigation on the Development of the Seventeenth Century Dutch Cartesianism and its Network(Fostering Joint International Research)

研究代表者

加藤 喜之（KATO, Yoshiyuki）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：00708761

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,400,000円

渡航期間：11.5ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、十七世紀オランダで活躍したデカルト主義者たちの書簡や大学での討論や著作を分析し、既存の出版物ではみることのできない彼らの知的ネットワークの一部に光をあてた。それによって、当時最先端と目されていたデカルトの自然の理解や哲学が、既存の宗教や政治体制へどのような影響を与え、また、これがどのような論争を生んだかが明らかとなった。こうした哲学と神学、科学と宗教の関係をデカルト主義者たちを中心に分析することで、デカルトからスピノザ、そしてライプニッツという従来の哲学史の流れを部分的に修正できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の近世哲学史研究では、デカルトやスピノザといった有名な哲学者たちが注目される。また、彼らの著作のなかでも自然学や形而上学などの領域の研究が盛んである。それに対して、本研究の学術的意義は、彼らと同時代人であるデカルト主義者たちの知的ネットワークに光をあて、またさらには神学との関係のなかで分析することで、政治的な文脈における哲学のあり方を明らかにできた点にある。

研究成果の概要（英文）：The present research project sheds light into the intellectual networks of the seventeenth-century Dutch Cartesians by analyzing their letters, university disputations, and books. Through the research, it has become clear how Descartes' s understanding of nature and philosophy had impacted the religious and political order of the day and had further burgeoned other controversies. By focusing on the relationship between philosophy and theology as well as science and religion through the analyses of the works of the Dutch Cartesians, the present research succeeds in a partial reformulation of the history of philosophy, which in general sees a liner progression from Descartes to Spinoza and eventually to Leibniz.

研究分野：思想史

キーワード：思想史 哲学 宗教学 キリスト教 オランダ スピノザ デカルト 十七世紀

1. 研究開始当初の背景

これまでの近世哲学史研究は、デカルトやスピノザといった有名な思想家と彼らのテキストの分析を中心としたものが主であった。また、近代以降の学術的な専門領域の発展によって、それぞれの領域が過度に分断されることで、近世という時代においては、複雑に絡み合っていた神学、政治、自然科学といった領域の包括的な分析が困難であった。こうした傾向に対して、近年オランダの研究者を中心に、当時の文脈に配慮し、十七世紀オランダの思想家たちの著作が分析されるようになってきた。研究代表者は、これまでも博士論文や科研費による研究課題で、そうした学術的な方法論をもちいて研究活動を行い、数名のデカルト主義者たちとスピノザとの関係を分析し、国際学会や論文などでその研究成果を発表してきた。

なかでも本研究の前身である科研費若手研究(B)「十七世紀オランダにおけるデカルト主義の宗教・政治思想とその影響」(H27-29)は、これまで初期近代(16-17世紀)の哲学・思想史研究では十分に光があてられてこなかった、十七世紀のオランダにおけるデカルト主義の発展を歴史的に位置づけ、その実態と影響を分析してきた。とくに注目したのは、次の三つの事柄である。第一に、オランダのデカルト主義にみえる宗教と政治の関係、第二に、デカルト主義と十七世紀を代表する哲学者ベネディクトゥス・スピノザ(1632-1677)の関係、第三に、この知的運動のなかでとくに影響力のあったデカルト主義者であるヨハネス・クラウベルク(1622-1665)の宗教・科学思想である。

以上の事柄については、前述の若手研究(B)によって明らかにされつつあった。しかしながら、本邦で閲覧できる資料にも限りがあり、これまでの研究で数人のデカルト主義者や彼らとスピノザの関係を解明しつつあるものの、より広い知識人同士のつながりを明確化しきれずにいた。

2. 研究の目的

こうした研究上の制約を乗り越えるために、本研究では、若手研究(B)が目的とした第一の事柄、すなわち十七世紀オランダのデカルト主義における宗教と政治の関係についての理解を深め、さらには近代の科学・政治に大きな影響を及ぼしたデカルト主義を、より明確にその宗教・政治的な文脈に位置づけることを目的とした。

以上を達成するために、本研究は、次の三点を具体的な目的として掲げた。第一に、デカルト主義者たちの書簡や大学での討論や著作を分析し、既存の出版物ではみることのできない彼らの知的ネットワークに光をあてることである。第二に、こうしたネットワークを分析することで、当時最先端と目されていたデカルトの自然の理解や哲学が、既存の宗教や政治体制へどのような影響を与え、また、これがどのような論争を生んだかを明らかにすることである。第三に、近年の哲学研究がなおざりにしてきた哲学と神学、科学と宗教の関係を分析することで、デカルトからスピノザ、そしてライプニッツという従来の哲学史の理解に大幅な変更を迫ることである。

3. 研究の方法

研究の方法として以下の二点があげられる。第一に、近世哲学研究を牽引する研究者のひとりであるロッテルダム大学哲学部のハン・ファン・ルーラー教授を海外共同研究者として選び、彼の手引きや助言をえつつ、当時の史料を分析する。具体的には、ロッテルダム大学図書館を

はじめとして、ライデン大学文書館やアムステルダム大学貴重文書館（Bijzondere Collecties）に、当時の知的ネットワークを理解するのに必要な書簡や討論といった一次史料があるので、これらの史料を収集し、デジタル化する。さらに、収集した史料を年代順に分類し、大学別、人別に分類する。さらに分類された史料を分析し、当時の宗教・政治的な流れのなかで知的ネットワークがどのように形成され、情報が共有されていたかを明らかにする。とりわけ、当時のキリスト教会との関係、宗教と科学の関係に重点をおき史料の分析を行う。

第二に、以上の分析を行うにあたって、オランダのデカルト主義を専門にする研究者を中心として、十七世紀の宗教研究の専門家や初期近代の科学史の専門家を加えて共同作業することが望ましいと判断した。具体的には、研究協力者とともにロッテルダムで国際シンポジウムを開催し、史料の分析を学際的に行い、各分野の専門家の知見を参考にしつつ発展させることである。また、本研究で構築した海外の研究者とのつながりを国内の研究者、とくに若手研究者とつなげるために、本研究課題の最終年度に国内外の研究者を招聘し、国内でシンポジウムを開催することを予定した。

4．研究成果

本研究課題の成果について、以下、国際的な研究ネットワークの構築、海外の文書館での史料収集と分析、さらには国際学会の開催という三点から詳述していく。第一に、国際的な研究ネットワークの構築についていえば、受入研究機関のロッテルダム大学哲学部は、初期近代の哲学・思想研究領域の欧州における重要拠点のひとつであり、とりわけ十七世紀オランダの思想研究に限っていえば、世界に類を見ない環境である。なかでも、共同研究者のハン・ファン・ルーラー教授をはじめとして、オランダ啓蒙主義の専門家ウィープ・ファン・ブング教授、近世オランダの宗教思想の専門家ヘンリ・クロップ教授、またジョン・ロック研究の専門家ポール・スフルマン教授らと研究上のネットワークを構築できた。また、スピノザ研究においては世界的な権威であるユトレヒト大学のピート・ステーンバッカー名誉教授や近世オランダにおける科学思想の専門家のナイメーヘン大学のクリストフ・ルツィ教授やカルラ・リタ教授、近世オランダの神学研究の専門家アザ・フードリアン准教授らとも研究上のネットワークを構築することができた。こうしたネットワークは、今後近世思想研究を国際的に展開していくうえで大変有益なものであるばかりか、国内の若手研究者を世界的なネットワークにつなげるという点においても重要だといえるだろう。

第二に、本研究課題の実施期間中に現地ではアクセスできない史料を集取し、分析することができたのは、重要な研究成果としてあげられる。とりわけ、ロッテルダム大学図書館をはじめとして、ライデン大学文書館やアムステルダム大学貴重文書館において、当時の知的ネットワークを理解するのに必要な書簡や討論といった一次史料を収集し、デジタル化した。また、集めた史料を年代、大学別、人別に分類し、史料分析を行った。さらには研究期間中に、以上の成果を共同研究者と共有しつつ、議論を重ね、論文にする作業を進めることができた。もちろん一年の渡航期間中にこうした史料の分析を可能な限り行ったが、限られた期間では分析しつくせない史料がまだ手元にデジタル化された状態で残っている。今後は、これらの分析に従事し、さらなる研究業績をあげていく予定である。

第三に、本研究課題の実施期間中に、オランダと日本で二度にわたって国際学会を開催することができた。まず、2019年1月に開催したオランダでの国際会議について詳述する。2018

年の秋に当該分野を牽引する研究者サラ・ハットン名誉教授（ヨーク大学）とテオ・ファベーク名誉教授（ユトレヒト大学）らへ主題講演の招聘をし、承諾を得た。また、他の参加者を選定するために、いくつかの研究ネットワークを通して、会議についての情報を公開した。その結果、12月中旬までにオランダ、ベルギー、イギリス、アメリカ合衆国、ドイツ、クロアチアの多数の研究者から会議参加の希望と発表内容の要旨を受け取り、共同研究者とともに主題講演者2名を含む13人の発表者を選定した。受入研究機関の協力もあり、2019年1月25日、26日に国際学会会議を開催し、学術的にも組織的にも成功をおさめた。発表された内容は、査読ののちオランダの学術雑誌の特集として2020年度中に刊行する予定である。これらの国際学会に加えて、ナイメーヘン大学哲学部が主催する研究会に招聘され、発表を行うことができたのも、重要な成果として加えられなければならない。

日本で国際会議を開催するために、2019年の秋に共同研究者であるファン・ルーラー教授を日本に招聘し、いくつかのワークショップや研究会に参加した。まず、10月25日には、東京大学の鈴木泉教授が組織したワークショップ「Rene Descartes: Descartes and History of Ideas」で司会を務め、共同研究者の発表、さらには質疑応答を通して、若手研究者との交流を深めた。また、10月26日には、研究代表者の所属する立教大学において、公開シンポジウム「近世哲学とキリスト教：正統と異端のはざままで」を開催した。本シンポジウムは、立教大学大学院キリスト教学研究科と日本ライプニッツ協会の協力もあり、上野修名誉教授（大阪大学）、津崎良典准教授（筑波大学）、川添美央子教授（慶應義塾大学）、長綱啓典准教授（日本大学）、町田一講師（日本ライプニッツ協会）を招聘し、開催した。当日は、発表者たちの活発な議論に加えて、西洋哲学・宗教研究に携わる多くの研究者たちも参加し、本研究課題と密接に関連する主題についての議論を深めることができた。こうした一連の研究成果は、論文として発表する予定であり、さらには他の研究者との連携を深めるなかで、論集を発表する予定である。

以上、国際的な研究ネットワークの構築、海外の文書館での史料収集と分析、さらには国際学会の開催という三点から本研究課題の成果について述べてきたが、こうした成果は海外の研究者との連携を深める可能性を与えてくれた本基金によるところが大きい。今後も、こうした成果を日本における西洋近世思想研究の発展に生かし、さらなる研究ネットワークの構築、世界的な研究の発展につなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤喜之	4. 巻 16
2. 論文標題 デカルト哲学をめぐる対立：ヨハネス・クラウベルクとバルーフ・スピノザ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スピノザーナ	6. 最初と最後の頁 93-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤喜之	4. 巻 93.1
2. 論文標題 スピノザと悪の問題：神学・政治的な解決策	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 101-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yoshiyuki Kato
2. 発表標題 Foreshadowing Spinoza: Johannes Clauberg's Unorthodox Concept of God and Miracle
3. 学会等名 Center for the History of Philosophy and Science, Radboud University Nijmegen Work-in-Progress Meeting (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoshiyuki Kato
2. 発表標題 Cartesianism and Spinozism: The Heretical Concept of Miracles
3. 学会等名 Orthodoxy, Heresy, and Indifference: Religion and Philosophical Practices in the Seventeenth Century (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤喜之
2. 発表標題 聖霊の果実 スピノザの政治哲学における公同の教会
3. 学会等名 近世哲学とキリスト教：正統と異端のはざままで（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Adriaan Neele, Carl R. Trueman, Ryan M. McGraw, Jonathon D. Beeke, Elco van Burg, Gyeongcheol Gwon, Todd M. Rester, Philip J. Fisk, Yoshi Kato, Daniel J. Ragusa, Brandon J. Crawford	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Vandenhoeck & Ruprecht	5. 総ページ数 252 (127-141)
3. 書名 Petrus van Mastricht (1630-1706): Text, Context, and Interpretation ("Petrus van Mastricht and Descartes's New Philosophy" (Yoshi Kato))	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ファン・ルーラー ハン (VAN RULER Han)	ロッテルダム大学・The Faculty of Philosophy・Professor	